



「オバちゃん感覚」

「なぜ、知事になったのですか」との問い掛けに「より社会貢献できる場所だと思ったから」と僕は語り、石原慎太郎氏は「国会にいたんじゃ、何もできないから。」と

臣と違って、色々なことができる」と続けた彼は、「国が動かないなら、こつちが先にやってやる」と啖呵を切ります。

「プロフェッショナルなボランティアでありたいオバちゃん感覚」と、自画自賛したのは僕。「『政官業の利権分配トライアングル』に御用学者と報道機関を加えた『政官業学報の現状追認ペンタゴン』を私は溶かしているから、それを死守したい人は生理的に、反射的に反発するんじゃないですか」と答えています。

「四半世紀を隔てて、若者像を小説で切り取った2人が、同時に知事の座にある。決して偶然ではない。目立ちたがり屋で、官僚嫌いの2人は、自分の言葉で政治を語り、政府とのパイプの太さ、組織選挙といった旧来型の価値観も手法も押しつぶしてきた。まさに、分権がすすむ時代の住民意識の変化を映し出す存在なのだ」と論説委員は締め括ります。

その「分析」を一旦留保し、知事就任1年後の2001年晩秋に上梓した『脱「ダメ日本」宣言』での田原総一朗氏の発言を再録します。「現地視察に一緒に回った

ら、田中康夫はすごく細かいところに気がつく。両性具有で、オバちゃんみたいだ。そう思ってみると、5カ年計画なんて抽象的なものを掲げてもあまり意味はない、という貴方の考えはよくわかる」。僕は述べています。「男は黒か白かのゼロサム発想。女はもつとフアジーで、ディテールに拘る。箱モノと同じで制度や法律ができればそれで世の中がすぐさま良くなるとは信じていない。必要なのは、職人というか現場の一人ひとりの心意気。机上の空論な会議を重ねて改革ビジョンを作るんじゃない。待ったなしの問題を現場で見ながら、市民を巻き込んで話し合う改革」だと。

連載100回目「全体の奉仕者」で採録した、「パブリック・サーバント」即ち「公僕」は田中康夫の政治的態度の最も基調にある」と大塚英志氏が「田中康夫の『サービス』精神」論考で言及した一文にも通ずる「勤性」です。「女性というのはスーパーでトイレトペーパーを買う時には1円でも安いモノを買いたい。それは『私利私欲の塊』。でも、それ以外の社会的なことへの参加では意外

と私利私欲は少ないんです。男は、ちよつと可愛い販売員の女の子がいると必要のないものでも余計に買っちゃう。でも、それ以外のことは私利私欲の塊。政治でも経済でも、会社でも社会でも、大学の人事抗争を見れば学者だって、みんな私利私欲で動いている」。

法律や前例に基づき方策を探る演繹法は、袋小路な20世紀型の解法しか齎しません。この制度つて変だよ、こんなサービスが有ればなあ、と老若男女が望む。無い物ねだりではない希望を実現すべくブレイクスルーする帰納法こそ『脱「ダメ日本」処方箋』。

が、政治でも経済でもジェンダーとしては女性の「指導者」は得てしてマニッシュユな出で立ち。そのメンタリテイも、マルカバツかで動く男性の「感性」。それは「地位は人をダメにする」の警句を裏付けるかの如く、島国ニッポンに限りません。愉快犯的「訪台」卒業旅行を敢行のナンシー・ペロシも、ヒラリー・クリントンの「好戦」論者と露呈した御年36歳、社会民主党党首でフィナンソド首相のサンナ・マリノも。世の中、難しいですね。

くに自民党では」と呟きました。
2人の知事を扱った2006年4月10日付『朝日新聞』「ニッポン人脈記」での発言です。
「東京（都知事）ならね。総理大

★次号10月号の発行日は6月23日(金)です。